

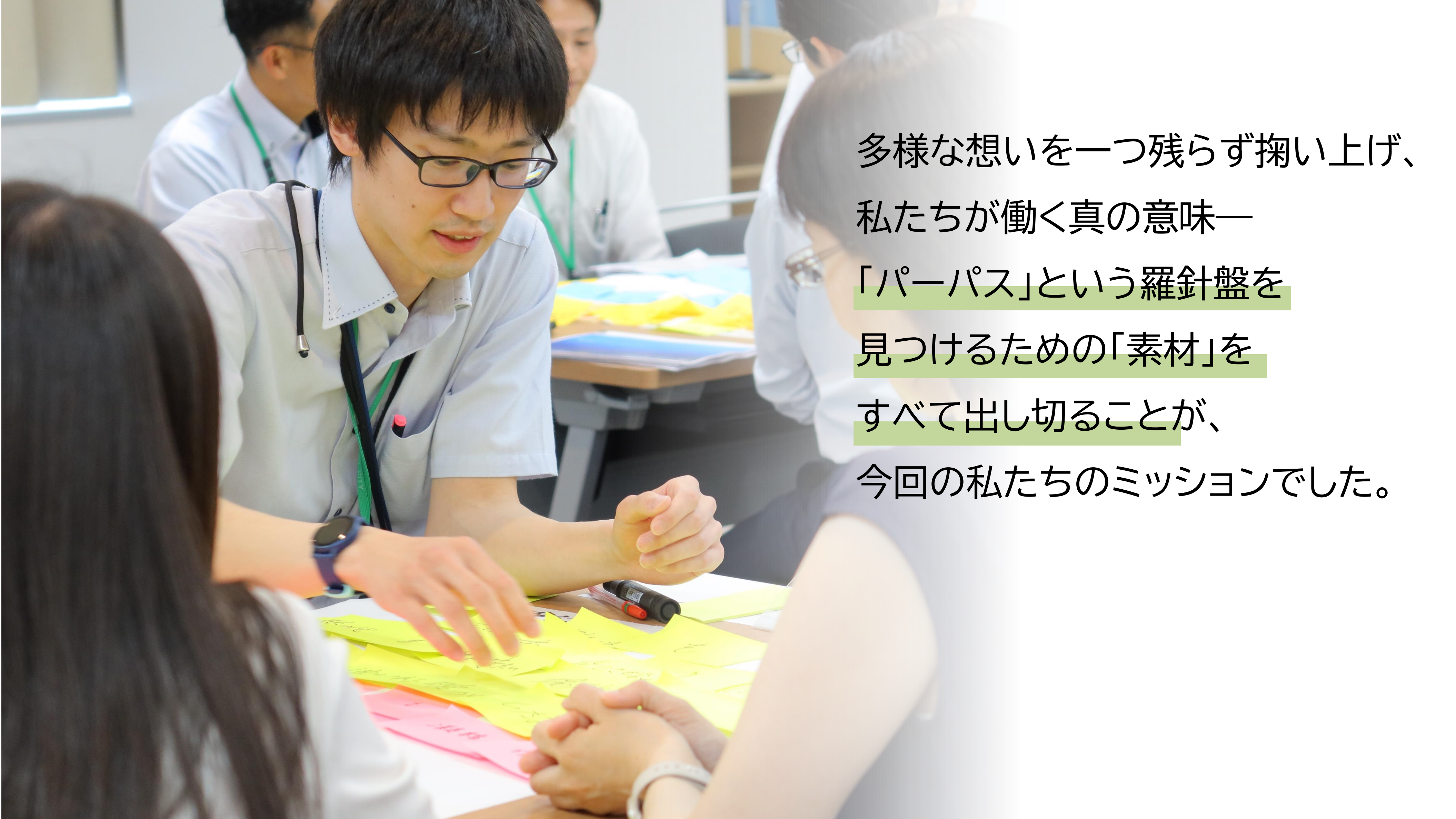
私たちの「働く意味」って、なんだろう？

庁内パーパス策定プロジェクト ～第3回(最終回)ワークショップの記録～

約3ヶ月、計3回に及んだ「庁内パーパス策定プロジェクト」のワークショップが、ひとつの区切りを迎えました。第1回で「街の誇り」を掘り起こし、第2回で「市民の願い」を多角的に見つめてきた私たち。

最終回となった第3回の会場には、これまでの議論を経て、自らの言葉で伊丹の未来を形にしようとする職員たちの強い熱気が満ちていました。

「私たちのパーパスとは」

A group of people, likely students or staff, are gathered around a table in a classroom or meeting room. They are wearing white short-sleeved shirts and green lanyards. One man in the foreground is wearing glasses and a blue watch, looking down at yellow sticky notes on the table. Other people are visible in the background, also working. The table is covered with many yellow sticky notes and some papers. A black marker is also on the table.

多様な想いを一つ残らず掬い上げ、
私たちが働く真の意味—
「パーパス」という羅針盤を
見つけるための「素材」を
すべて出し切ることが、
今回の私たちのミッションでした。

私たちが深く議論したのは、
市民のみなさまの
「当たり前」の日常を支えるために、
自分たちがこれまでどれほどの
情熱を注いできたか、
という事実の数々でした。



安心と賑わい、利便性と自然。
ときに相反する価値の間で揺れ、
悩みながらも、市民の心地よさのために
立ち向かってきた歴史。
現状維持に留まるのではなく、
一步踏み込んだ未来の伊丹をどう描くか。
考え抜いた先にあったのは、
職員一人ひとりの内側にあった
「伊丹への深い献身」でした。



「私たちのパーパス」と「具体的なアクション」を考えてみた。

第3回(最終回) 庁内パーパス策定ワークショップ

2つのテーマ

【WORK1】パーパスの検討

【WORK2】パーパスを実現するために 私ができるアクションは？

【WORK1】パーパスの検討 ～パーパスの考察～

10つの各班がそれぞれの視点から伊丹の未来を定義し、パーパス案を発表しました。
それは単なる案の提示ではなく、各班の意志が交差する瞬間となりました。
誰かに与えられた言葉ではなく、職員が悩み、本音で議論する中で勝ち取った、
血の通ったパーパスの方向性となりました。



【WORK1】パーパスの検討 ～各班のパーパス案～

- オール伊丹で日本一ちょうどいい幸せに挑戦する（またはデザインする）
みんなの伊丹愛（いたみあい）を育むホームタウンへ
- フラットなつながり、ちょうどええ、ここが私のまち
- 伊丹行っとく？ 完成と未完成が共鳴する伊丹市へ
- 人とのきずなに満たされる愛着がわき出る眩しいまちに
- 「ありがとう」と「おかえり」がある家族タウンを紡いでいく
- 幸福密度がぎゅっと高い街をオール伊丹で
- 安心と賑わい織りなす伊丹時間を共に
- みんなでつくる伊丹という居場所
- みんなでつながるフラットいたみ
- つなぐ・はぐくむ・めぐらせる



【WORK2】私ができるアクションは？ ～具体的アクションの考察～

想いの言語化に続き、後半戦では「明日から自分はどう動くか」を自分自身に問いかけました。
パーパスの方向性が見えてきたことで、理想論だった未来が、
明日からの具体的なアクションへと繋がっていきます。



【WORK2】私ができるアクションは？ ～具体的アクションの考察～

「マイノリティの実情を知るために、まず手話を学ぶ」

「部局の垣根を越え、自ら旗当番の列に加わる」

「1gの予算の使い方まで、これが誰の幸せになるかを問い直す」

会場のあちこちで「これならできそう」「やってみたい」という、
自発的な変化の萌芽が見られました。

アクションの大きな方向性

- 市民との「つながり」と「対話」の深化
- 組織の「縦割り解消」と「共創文化」の育成
- 業務の「最適化」と「創造的挑戦」
- 職員の「マインドセット」と「郷土愛」
- 「伝える・魅せる」広報・PRの強化



ワークショップ最後の感想共有では
「一生に一度の
経験をしていると感じた」

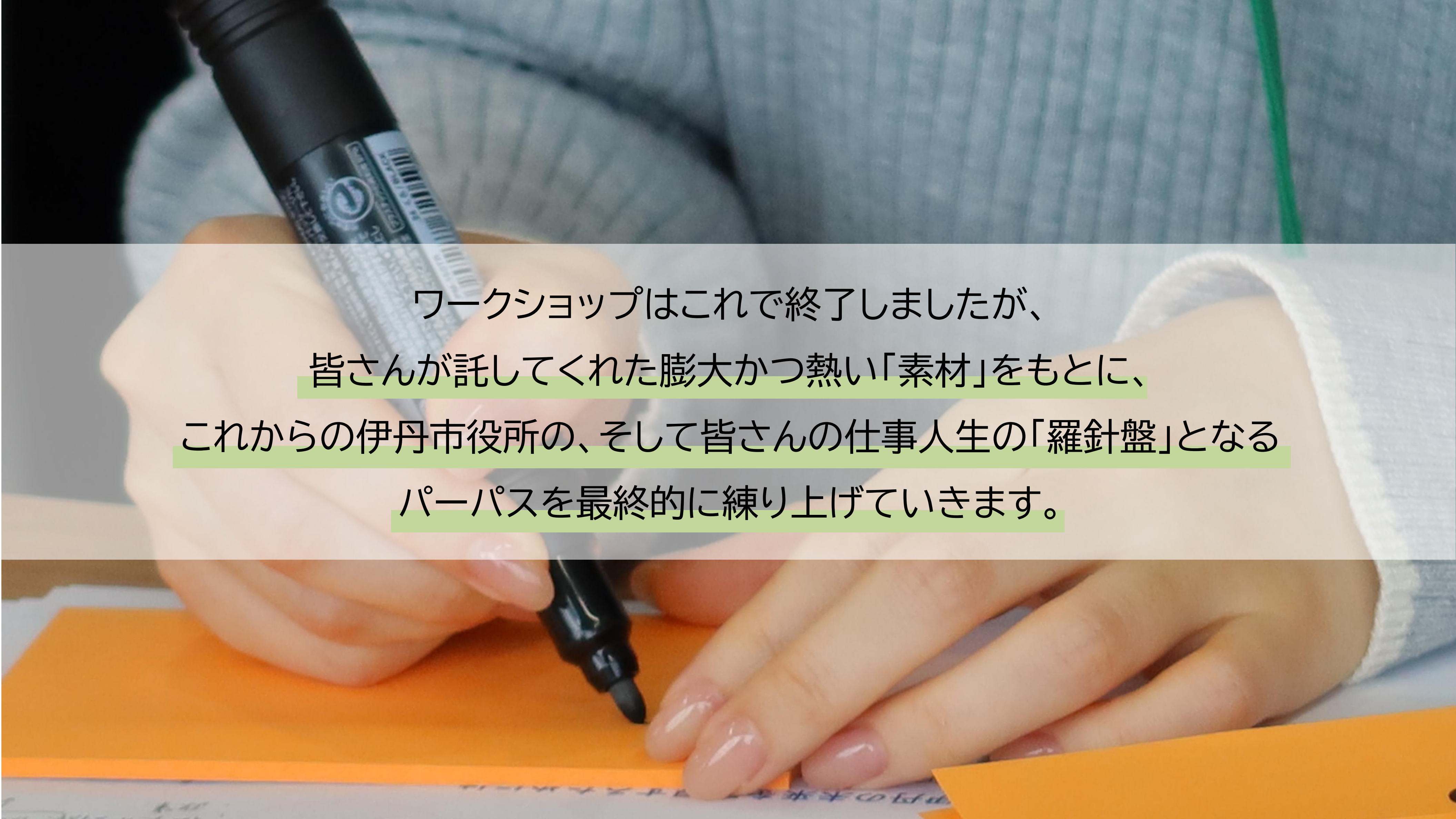


「伊丹市政の歴史に刻まれる
1ページに参加した」など



最終回を終えた参加者の顔には、
確かな手応えと
誇らしさが滲んでいました。



A close-up photograph of a person's hands. The left hand holds a black marker, and the right hand is positioned to write on an orange sticky note. The background is a light blue textured surface. The text is overlaid on the image, with each line in a separate light green box.

ワークショップはこれで終了しましたが、
皆さんが託してくれた膨大かつ熱い「素材」をもとに、
これからの伊丹市役所の、そして皆さんの仕事人生の「羅針盤」となる
パーパスを最終的に練り上げていきます。

私たちの職場は、
そしてこのまちは、どう変わるのか。
伊丹市役所の新たな羅針盤となる
パーパスの誕生に、どうぞご期待ください。



中田市長より、本日の感想

『今日はお疲れ様でした。皆さんの発信がどんどん強まり、会場が熱くなっていくのを感じました。普段なかなか言えないことや、考えなかったことを表に出す良い機会になったのではないのでしょうか。今回のワークショップを通じて、パーパスという料理を作るための「素晴らしい素材」がようやく見えてきました。今までは何ができるかわからない状態でしたが、新鮮な野菜や美味しいお米のような、質の高い意見がたくさん出揃いました。これらをどう料理し、皆さんの腹にストンと落ちるような「最高の羅針盤」に仕上げていきます。ぜひこれからの展開も楽しみに、期待してもらえればと思います。』

